様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 23 日現在

機関番号：22302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009 年度～2011 年度
課題番号：21720033
研究課題名（和文）
写真と歴史のアクチュアリティ研究――アメリカ現代写真におけるデモクラシーの価値
研究課題名（英文）
A Study on the Actuality of Photography and History: Democracy Seen Through Contemporary American Photographs
研究代表者　　日高　優　（HIDAKA YU）　群馬県立女子大学・文学部英米文化学科・准教授
研究者番号：70404910

研究成果の概要（和文）：
写真と歴史のアクチュアリティを巡る本研究は、われわれ写真の観者にとって写真イメージをとおして経験される痛みというものが、歴史がわれわれに到来する重要な契機となりうることを明らかにした。まず本研究を遂行するための研究計画に基づき、ヴァルター・ベンヤミンやエドゥアルド・カダヴァら思想家の案出した概念を用いて、歴史のアクチュアリティがいかにわれわれに触れに来るかを分析するためのフレームワークを構築した。さらに、こうした概念を手掛かりとして用いて写真分析をおこない、写真における歴史のアクチュアリティの到来を検証した。本研究の最終年度には、写真イメージを通して歴史のアクチュアリティが到来するのは、写真が歴史のモメントを〈描く〉のではなく生き生きと〈経験させる〉ことによってわれわれ観者を歴史的局面に触れさせるときであるという結論を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：
In this study on the actuality of photography and history, I proved that pain experienced through photographic images can be an important moment for us, its viewers, when history presents itself to us. First, Based on my plan to pursue this study, I constructed a framework to analyze how the actuality of history comes to touch us with the help of conceptions molded by such thinkers as Walter Benjamin and Eduardo Cadava. By using these conceptions as hints, I then analyzed photographs to show the appearance of historical actuality on them. In the final year, I concluded that historical actuality comes to appear through photographic images when they let us touch a historical aspect not by depicting it but by inviting us to experience the moment of history, live.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目　　分科：哲学
細目：美学・美術史

キーワード：写真、アクチュアリティ、デモクラシー、歴史、アメリカ、メディア、表象、映像文化

１．研究開始当初の背景

（１）

本研究の遂行者は、本研究に至るまで、〈パフォーマティヴィティ〉概念を導入しつつ現代アメリカ写真を分析することによって、いかに写真という装置がデモクラシーの思考を形成してきたかを研究してきた。この研究を遂行するなかで発見したのが、写真を巡る〈歴史〉と〈アクチュアリティ〉という問題系である。この問題系は写真メディアにとって根源的な問題であり、研究意義は大きいと考えた。そこで、写真を通して歴史がアクチュアルなものとして観者に到来する構造を探ることを主軸に据えた研究が不可欠であるというこの発見から出発したのが、本研究である。

（２）

また、先行研究の観点から本研究開始当初の背景について記したい。先行研究としては、まず、ヴァルター・ベンヤミンの仕事が重要になってくる。ヴァルター・ベンヤミンの写真論研究は端緒についたというところであり、研究の萌芽が散発的にみられる状況にとどまっている（ロラン・バルトの「プンクトゥム」やマリタ・スターケンの『アメリカという記憶』、テッサ・モーリスースズキの『過去は死なない』における、記憶と写真を巡る議論なども、この研究の背景として、重要な参照点となった。本研究の課題の視座にもっとも有益な研究は、ベンヤミンを手掛かりとしたエドゥアルド・カダヴァの『光の言葉』であった（ただし、カダヴァの主眼は〈記述〉の問題にある）。とくに「写真を〈みる〉」経験を写真の時間構造の観点から分析することは、歴史という時間をめぐるアクチュアリティの問題に向かうに当たって重要になると本研究では考えている。本研究が提起する、〈写真をみること－時間構造－歴史〉をひとつの問題系として明確に析出する議論は新しいものだが、写真をみることの時間性については散発的にではあるがいくつかの有用な参照点が存在し、本研究ではそれらを活用した（スティーヴン・ショアの『写真の性質』やジョン・シャーカフスキーの『写真家の眼』を巡る映像文化論研究を中心とした議論など）。本研究は、こうした背景のもと、新たに議論を構築していったものである。

（３）

さらに、「リアリティ」などの、「アクチュアリティ」の隣接概念についての知見も、主に精神医学等の分野において蓄積されている。こうした知見は、例えば、アクチュアリティ概念と主体の関係を考察する手掛かりともなる。本研究ではこうした研究動向を背景にもち、その知見を積極的に参照した。

（４）

従来の写真研究の大半が芸術ジャンルにおける作家研究や写真史研究、あるはテクノロジー開発史や哲学的思弁というかたちで分断されてしまっている背景があり、本研究のように写真というメディアの存在様態を歴史のアクチュアリティという視角から総合的に把握しようとする切り口はそれ自体、新しいものとなっている。視覚文化論研究も日本ではまだ散発的なものにとどまっており、このような背景に照らして、写真メディアの特性から具体的な事例を領域横断的に探ろうとする本研究のアプローチは、視覚文化論研究に寄与するものでもある。

２．研究の目的

（１）

写真はかつて存在した事物の出来事をとらえた光の痕跡、光のエクリチュールであり、常に既に過去に属する。だがなぜ、そのような写真が現在に生きるわれわれにショックを与えたり、われわれを動かしたりする力を有しているのだろうか。つまり、写真はなぜ、アクチュアルなものとしてわれわれに過去を、歴史を感受させうるのかという問題を解析することが、本研究の目的である。

さらに、歴史にアクチュアリティを獲得させ、歴史を生きられるものとして駆動させる写真表象の力を解明することで、写真がポジティヴにもネガティヴにも使用されて歴史を構成・破壊し、揺動化するモメントを探り、歴史を生きさせる構造を具体的な写真の分析を通して探ることを目指した。つまり、本研究は、写真表象がどのように歴史と共振しあったり反発しあったりしながら、写真の観者に歴史を通じて精錬されてきたある価値を（本研究においてはアメリカのデモクラシーの価値を）アクチュアルなものと感受させているのか、その原理をアメリカ現代写真という具体的事例を通して分析することを目指した。

本研究の直接的な目的の先にあるのは、もっぱら過去に属すると考えられがちな歴史を現在に生きさせることで、例えば、共生が求められるにもかかわらず固着化している歴史的反目や対立の磁力を脱することの困難な、われわれの生を問いなおすという仕事である。

以下、研究の目的についてより具体的に、直接的な題材を紹介しつつ簡潔に説明していく。

（２）

①本研究は写真表象において歴史のアクチュアリティがいかに生成してくるのか、その原理を、具体的にはアメリカ現代写真におけるデモクラシーの価値の生成を通じて解析することを目的とした。分析対象の中心とするのは、アメリカ写真史において一般に「現代写真」と画される写真、即ち、1950 年代半ば以降の写真表象である。いかに歴史という過去が現代を生きるわれわれにアクチュアルに生きられているかを検証するという目的のために、過去と距離をもつ現代という時代に主に研究の題材を求めた。

②また、デモクラシーとはアメリカの歴史を通して強力に形成されてきた価値であり、アメリカの歴史全体をデモクラシーの生成変化の歴史としてみることができる。本研究は、現代アメリカ写真の表象する現代のデモクラシーに建国時にまで遡る過去のデモクラシーの残響が見出され、来るべき未来のデモクラシーの予兆が読みとられてきたことを検証することを通じて、本研究課題を解明することを目的とした。特に、写真を〈みる〉という契機に着目することで（１．研究の背景（２）を参照のこと)、〈みる〉経験が、現在において過去が立ち現れ未来が萌芽する時間の出来事の経験であることを論証することを目指した。

③本研究は、アメリカの写真史においては一般に「現代写真」と分類される 1950 年代半ば以降の写真表象を主に分析するかたちをとるが、最終的には歴史を貫く議論を提起することを目指した。従って、本研究の目的の裾野は、現代写真のみの議論にとどまらないものとなった。初期写真のデモクラティックな価値の残響が、いかに現代アメリカ写真において引き継がれ、変奏され、補強されているかを検証し、デモクラシーのアクチュアリティを歴史の運動のうちに捉えることが、本研究にとって不可欠だったからである。さらに、写真はアメリカがいまも抱え込んでいる根源的な問い――人種や自由、平等、資本主義、メディア・イメージの氾濫など――を内包している。写真表象を分析することを通してそうした問いをも逆照射させ、今後もこれらの問いに取り組むアメリカの未来について思考するのにも資するよう、本研究を遂行した。

３．研究の方法

（１）2009 年度

研究の目的の達成に向けて、2009 年度は基礎的作業をおこなった。具体的には、理論的仮説を構築し、本研究の理論的フレームワークを整備する作業をおこなった。まず、分析の道具となるキー概念を抽出するために、写真表象と歴史の相互交渉におけるアクチュアリティという観点から思想史的議論を整理しなおした（前述のベンヤミン、カダヴァ、スターケン、バルトらの議論）。アレゴリー、アウラ、視覚的無意識、文化的記号やトラウマといった概念を抽出し、検討した。そのうえで、これまで充分に研究されてこなかった、〈みること〉において析出される写真メディアの特性という視角を本研究では導入して前景化し（前述のショアやシャーカフスキーを参照しつつ）、歴史のアクチュアリティ生成原理についての仮説を組み立てた。写真メディアについての従来の議論は痕跡性、証言能力という問題に集中してきたが、本研究では新たに写真を〈みる〉という観点を導入し、仮説を立てた（どのようにして写真を通して歴史がアクチュアルなものとして到来するか、そのモメントを生成させるフレームワークを仮説的に構築した）。

（２）2010 年度

理論的フレームワークを整備して仮説をつくった 2009 年度の成果をふまえ、2010 年度は具体的事例にこの仮説を適用し、その妥当性を検討した。具体的には以下の方法により、研究を遂行した。

① まず、時期を区分するという方法を採り、次のように研究を遂行した。本研究は、現代アメリカ写真を通時的、網羅的に扱うことに眼目がないため、アメリカ社会にとって特権的な、デモクラシーの価値に触れる経験を事例として選定し、取り上げる方法を採った。この観点から、2010 年度の研究は大きく分けてふたつの時期区分に対応する形でおこなった（前史となる 1950 年代半ば以前の写真を巡るデモクラシーの議論と写真映像の分析／現代写真を巡るデモクラシーの議論と写真映像の分析）。前期については、本研究者が既に遂行した本研究以前の研究（科学研究費補助金 1820018）において多くの部分を整理し終えていたが、これまでの研究では漏れてしまっていた本研究の視座、すなわち歴史とアクチュアリティの視覚から事例を整理し配置しなおした。従って、2010 年度に遂行した研究の主な対象の時期区分は後期であり、後期の現代写真に仮説を適用してその妥当性を検討する作業が中心となった。

② 2010 年度の研究の中心は事例分析にあり、その方法としてはまず、事例を抽出する作業をおこなった。事例の抽出方法については、ケネディ大統領暗殺やヴェトナム戦争、公民

権運動などアメリカ史における重要なポイントに加え、近年の争点となっている 9.11 や戦争記念碑問題なども積極的に取り込むこととした。次いで、抽出した写真の分析に際しては、写真に表象されるデモクラシーの価値を、ポジティヴなベクトルの強いものとネガティヴな方が強いものとに分類したうえで、各々の位置において、ポジティヴにもネガティヴにも揺らぐ〈振れ〉のもとで写真を把握し、マッピングするという方法を採った。

（3）2011 年度

最終年度となる 2011 年度の研究は、2009・2010 年度の研究をふまえ、当初の仮説的な理論のフレームワークを再点検し精密化したうえで、研究を総合・総括するという方法を採った。具体的には、本研究の全体を通して、歴史＝写真のアクチュアリティを担保するものとして、とくに〈みることの痛み〉――イメージに描かれているものばかりではなくイメージ自体が傷つけられていること、観者自らのみることの不能の経験など――という契機が次第にはっきりと見出されてきた。そのため、この契機をよりクリアに検証することの可能な題材を検討したうえ選定し、仮説の精度を高めたうえで総括した（〈みることの痛み〉の契機の析出された事例としては、口頭発表と論文発表にあるように、写真家のゲイリー・ウィノグランドの仕事とアンディ・ウォーホルの写真製版シルクスクリーン作品を分析するかたちで考察した）。

４．研究成果

（1）

写真は過去に存在した事物や出来事をとらえた光の痕跡であるが、そのような写真がなぜ、アクチュアルなものとしてわれわれに過去を、歴史を感受させうるのかという問題を解析することを目指した本研究が、当初仮説として想定していたことは、写真イメージを〈みる〉ことの時間構造に、そうしたアクチュアリティを到来させる鍵があるのではないかということだった（より詳細にいえば、現在・過去・未来を凝集し出会わせる写真メディア固有の時間構造が実在性と潜在性を内包させており、その両者の反転可能性が写真を通して歴史をアクチュアルなものとして到来させるモメントを構成するのではないか、と仮説を立てた）。この仮説を出発点にして、写真メディアの特性を前景化させつつ写真を〈みる〉経験を解析していくと、仮説の方向性としてはおおむね妥当であると検証することができた。

（2）

仮説の検証に加え、本研究をとおして新たな視座を得ることができた。つまり、〈みる〉こととは別に議論されてきた、写真表象を巡る思想史的問題系のキー概念――トラウマや視覚的無意識、アウラなど――のなかでも、とりわけイメージと痛み、イメージと傷という問題系があり、それが観者に対してアクチュアリティを担保するのではないかという新しい視座を得るに至った。言い換えると、傷や痛みの感覚が〈みること〉そのものの経験と分かちがたく結びついており、とくに写真イメージをみることの苦痛、あるいはみることの不能を巡る苦痛、さらにはイメージが傷つけられたという身体の感覚が、写真の表象する歴史をアクチュアルに到来させる契機となっていることを、本研究は明らかにすることができた。また、研究を通して得たこの新たな視座を、アメリカの歴史にとって重要なターニングポイントを成した 1960 年代の、写真を巡る二つの大きな仕事（ゲイリー・ウィノグランドとアンディ・ウォーホルの仕事）に探り、成果として発表することができた。

（3）

本研究は、アクチュアリティとは過去の事物に対して現在において絶えず新たに意味を生成させ駆動させる力であり、この概念を〈みる〉という人間的営為に関わるものとして定位することができた。従来の写真研究は、写真の証言能力や事実性、痕跡性といった観点からの議論に集中するがために、〈みる〉という行為の次元を置き去りにしてきたきらいがあり、〈みる〉視座を中心に据えることの妥当性と意義を本研究では明らかにすることができた。

そのうえで、本研究は、過去や未来が孕まれるものとしての現在において〈みる〉という写真の時間性において、アメリカン・デモクラシーの歴史的アクチュアリティが構成され、感受されることを動態的に捉えるころができた。アメリカの文化研究としても、写真映像研究としても、そもそも写真イメージの分析は静態的な図像解釈にとどまっており、このような動態的な研究は蓄積がほとんどない（絵画を主な対象とした、ハル・フォスターらの論考はある）。その意味でも、本研究はアメリカ文化研究と写真研究の両者において、新しい研究の方向性を示すという成果をあげることができたと考えている。

（4）

アメリカ写真を文化的に解析するという研究は未開拓の仕事であり蓄積も少ない。上述した動態的研究の視座の新しさに加え、本研究は写真研究及びアメリカ文化研究のど

ちらにおいても研究例が少なく独創的であり、本研究を遂行できたこと自体が今後の研究の足がかりとなる成果を成している。写真研究の範囲内について詳述すれば、従来の大半の研究は芸術やテクノロジー、写真メディアの特質を巡る哲学といったジャンルに分断的で実際の写真映像分析をすることも極めて少ないかたちで遂行されてきたが、本研究の成果はジャンル横断的で、かつ、具体的事例として写真分析が中心を成している。その意味で、本研究は従来の研究の方向性を広げ、今後の写真研究に資するものとして成果をあげることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Yu HIDAKA「The Experience of Pain through an Image: On Human and Inhuman Elements Present in the Works of Andy Warhol」『群馬県立女子大学紀要』第 33 号、2012 年、pp.39-47、査読無。

② 日高　優「写真＝光のドキュメント――潜勢するものを引き出し賦活するために」『REAR』第 26 号、2011 年、28-33 頁、査読無。

③ 日高　優「写真の森に踏み迷う――ウィリアム･エグルストンの世界」『写真空間』第４号、2010 年、9-27 頁、査読無。

④ 日高　優「無限後退のリズムパターン－レイ・K・メッカーの写真＝世界」『ecce 特集　映像とアヴァンギャルディズム』創刊号、2009 年、120-136 頁、査読無。

〔学会発表〕（計４件）

① 日高　優「イメージに傷つくということ――アンディ・ウォーホル作品に潜在する人間と非人間」、東京大学グローバル COE UTCP・延世大学国学研究院 HK 事業團主催国際ワークショップ「批評と人間」、2011 年 6 月 11 日、延世大学・ソウル（韓国）

② 日高　優「映像消費の時代における脱社会的社会批判――アンディ・ウォーホルのポップアートを巡って」、立教大学アメリカ研究所主催研究会「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」、2011 年 12 月 3 日、立教大学（池袋）

③ 日高　優「先回りするイメージ――ウォーホルとウィノグランドの 60 年代アメリカ」日本アメリカ文学会東京支部演劇・表象分科会例会、2011 年 5 月 28 日、慶応義塾大学（三田）

④ 日高　優「拡張する写真―ネイサン・ライアンズの「残像」展（1967）を手掛かりに」、表象文化論学会全国大会研究発表２：ポスト・ミディウム・エステティック、2009 年７月４日、京都造形芸術大学（瓜生山）

〔図書〕（計２件）

① 野田研一（編著）・日高　優・ほか 10 名、ミネルヴァ書房、『〈風景〉のアメリカ文化学』、2011 年、39-60 頁。

② 日高　優、青弓社、『現代アメリカ写真を読む――デモクラシーの眺望』、2009 年、312 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
日高　優（HIDAKA YU）

研究者番号：70404910

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：